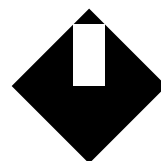


公認会計士稲門会



「人生百年時代と公認会計士」



渡辺 俊之
(昭和43年第一商学部卒業)

公認会計士稲門会の会長を仰せつかって、早3年が経過しようとしています。任期満了を控えて、締めくくりをしたいと考えます。

会長一年目は、同業種交流、異業種交流の必要性、人脈に頼らない事業展開そして公認会計士稲門会活動について語り、会長二年目は、建学の精神とAI時代を迎えての監査人としてのありうべき姿勢につきを問いかけてきました。

そして人生も、会長の任期も幕引きの時期を迎えていますので、会計の素晴らしさ、というより複式簿記の素晴らしさの観点から、人生百年時代の公認会計士資格の魅力とその生き方について考えてみる事にします。

1. 人生百年時代の公認会計士の生き方

人生百年時代を迎えて、70歳「従心」の時代は老年者年中組、80歳代からがやっと老年者年長組で、そこからエンディングを迎えるまでの人生こそ、マズローの欲求5原則の最終段階である自己実現に対する欲求を満たす時間帯に入れるのかもしれない。

70歳代は「従心所欲 不矩踰」すなわち、「心の欲する所に従えども、矩（のり）を踰（こ）えず」

の時間帯で、せいぜい上記五原則の4番目「社会的欲求」を満たしているかの自問自答の時間帯です。

さて「働く場所」「働くスキル」「働く意欲」そして「働ける健康」が与えられているなら、公認会計士は、監査法人等の定年後といえども、十分に社会に貢献できる場が与えられます。「働く意欲」さえあれば「働く場所」は自ずと見つけれられます。その前提には公認会計士という「働くスキル」が公に認知されているからです。

独立して会計事務所経営やコンサルタント業務を行っている公認会計士の場合も、定年がありませんから、いつまでも働くことが可能です。

2. 複式簿記の世界観の必要性

一方、受験生の減少傾向をもって、現在の会計業界は、いま一つ魅力を欠き、優秀な人材がなかなか参画してこないという話もあります。しかしそれは短略的な見方であって、様々な不名誉な事件に会いながらも、我々の諸先輩が築いてきてくれた、我が業界に対するリスペクトはまだまだ捨てたものではない筈です。

私は「複式簿記って素晴らしい！」のテーマであちこちの場で問いかけています。一つの経済行為たる取引を常に原因と結果の複眼的思考で、複式簿記の世界観で捉えることが身についているせいか、要件事実の世界観の視点からしか経済行為を眺めようとしない方々との議論でも、貸借平均の原理、自己検証能力、説明容易性とのからみで、見つけれられていなかった論点が浮かび上がってくるからです。

最先端の新たな経済事象への対応も法律的視点のみで考えていると、頭の中の整理がつかなくなります。複式簿記の発想で見直すと問題点が浮かび上がってきたりします。

このことは公認会計士の資格を前提とする会社

経営者や政治家、官僚、学者であればさらにその強みが生かされてきます。

3. この業界に入りたての方達へ

公認会計士の資格を取ったからと言って、この業界に身を置く必要はなく、公認会計士の資格は、単なる人生の通過点という位置づけでよいと考えます。役目上、大学の会計研究科の卒業式や公認会計士講座の開講に当たって挨拶をする機会がありますが、以上のような視点で話をさせていただいております。

そして人生百年時代という言葉が何の違和感もなく受け入れられる時代になりました。

定年という人生の最大の区切りである「節目」がある事が、人生百年時代の定年後の30年から40年の暮らし方に注目が集まるのです。年金暮らしで何のする事もなく65歳から、30～40年暮らすことは、考えられません。自由に時

間を使って持て余し気味の「時間を潰す」のではなく、「時間に追われる」生活の方がハリがあると思うこの頃です。というより私の場合はいまだに働かされている事に対する言い訳かもしれません。

とはいえ70歳代からの人生の送り方を考えるのは、定年間際では遅すぎます。趣味に生きるにせよ、奉仕活動を行うにせよ、またその傍ら働き続けるにせよ「働く意欲」を持ち続けるには、雇われの身として働かされる立場に自らを置くのではなく、所帯の大小に関係なく、自らがテーマを見出しながら働ける環境を作ることではないかと最近つくづく感じています。しかし生涯現役という考え方は無責任かもしれません。個人としてはいいとしても、能力は年とともに減退します、周りの迷惑、後進の育成という視点から80歳からの老年者年長組の生き方を模索しないといけないかもしれません。

平成30年度定期総会のお知らせ

平成30年度定期総会は、下記の通り開催の予定です。会員はもとより早稲田大学で教鞭をとっておられる先生方、他大学よりの来賓の方々も多数出席され懇親のよい機会です。是非多数の会員に参加をお願い致します。

日 時	平成30年7月2日(月)	定時総会：午後6時30分より 懇親会：午後7時より
場 所	大隈会館	201・202号室

「公認会計士稲門会奨学事業」 －平成29年度奨学事業報告－



(奨学事業委員会委員長)

小西 彦衛

(昭和44年商学部卒業)

本奨学事業にご理解をいただき、奨学資金をお寄せいただいております多くの会員の皆様に敬意を表するとともに心から感謝申し上げます。

早稲田大学は草創期から今日までアジアとの学術及び人材の交流に重きをおいています。アジア地域からの留学生を支える本奨学事業は、近隣諸国との友好親善のためにも有意義なものと存じます。

奨学生との交流

奨学生は奨学金を研究図書の購入、アルバイトの削減等に活用して勉学に励んでいます。

毎年12月に「総長招待 指定寄付奨学生の集い」が開催され、奨学生、奨学資金寄付者、本学役職者をあわせ百数十名の参加者が懇談していま

す。平成29年度は、渡辺俊之会長が寄付者を代表してご挨拶しました。

当会の定期総会懇親会では会員の皆様が奨学生と親しく懇談していただいています。また会報に奨学生の寄稿文を掲載しています。

奨学金給付の概要

皆様からの奨学資金を原資として、毎年、留学生4名に各50万円の公認会計士稲門会奨学金を給付しています。

奨学資金は、“広く軽く”を方針として、皆様に無理のない拠出をお願いしています。有為な人材を育む本事業を永く続けるために、多くの会員の皆様の参加をお願いいたします。

寄付金の取扱い

奨学資金は早稲田大学への寄付金として、所定の振込用紙で大学の口座に振り込んでいただいています。総長名の領収書と所得税の寄付金控除の証明書等が発行されます。

早稲田大学のWebサイトから常時寄付申込みができます。〔早稲田 寄付〕**検索**で寄付トップ画面に入ります。寄付申込みフォームにインプットする際に、「寄付の種類」は「奨学金」を選び、「指定先」は「公認会計士稲門会奨学金」を選びます。支払方法はクレジットカード決済又はインターネットバンキング決済（ペイジー）です。



平成29年度の事業実績

1. 奨学金の給付状況

大学より次の4名を推薦いただき、各人に50万円を給付しました。(学年は給付時)

KIM,Hyun Tae	国際教養学部	4年	韓国
VIBOONSONTI,Litta	アジア太平洋研究科	2年	タイ
CHENG,Xinyao	環境・エネルギー研究科	1年	中国
NGUYEN,Thi anh nguyet	経営管理研究科	2年	ベトナム

2. 奨学事業収支年度別一覧(単位:万円)

年 度	H3~H25年	H26年	H27年	H28年	H29年	累 計
寄付金収入	5,051	135	121.5	107.5	163.5	5,578.5
(寄付者数)	(1,551名)	(49名)	(45名)	(43名)	(48名)	(1,736名)
奨学金給付額	4,600	200	200	200	200	5,400
(奨学生数)	(92名)	(4名)	(4名)	(4名)	(4名)	(108名)
資金繰越残高	451	386	307.5	215	178.5	

3. 平成29年度寄付者芳名(順不同・敬称略) 平成30年3月31日現在

渡辺 俊之	近野 博	勝島 敏明	藤田 世潤	奥山 章雄	飛永 信雄	内田 善三
小林 晟祐	佐藤 正典	猪股 世紀	社本 公一	里村 豊	西山 隆司	関根 愛子
高井 宏司	水野 義雄	鈴木 豊	石田 清絵	山口 俊明	山田真之助	上野 紘志
尾崎 隆昌	石原 裕	小林 正樹	戸田 厚司	金田 賢二	七松 優	長峯 徳積
吉村 智明	杉田 純	塚田 知信	堀内 三郎	渋谷 道夫	伊勢 利一	久保 直生
岡野 雄次	松下八寿彦	小暮 和敏	堀 秀行	大滝 史博	四月朔日丈範	
関口 典子	水谷 太郎	鴛海 量良	津田 良洋	福田 安孝	袖山 裕行	小西 彦衛

以 上

会費納入のお願い

今年も会費納入の季節となりました。同封致しました振込用紙で御振込頂ければ幸いです。なお、日本公認会計士協会準会員の方は、印字されている金額を3,000円にご訂正のうえ御振込頂けます。また、ご自身の会費納入状況をお知りになりたい方は、会計担当の副会長もしくは常任幹事にご連絡下さい。

公認会計士 6,000円 日本公認会計士協会準会員 3,000円
(振込先 郵便振替口座番号 00170-2-163893 口座名 公認会計士稲門会)

「今後の夢・抱負、 早稲田大学での生活・思い出等」



テイ キンギョウ
(環境・エネルギー研究科 /
修士課程 2019 年卒業予定)

私は早稲田大学環境・エネルギー研究科のテイキンギョウと申します。

公認会計士稲門会奨学金生に採用していただき、誠にありがとうございます。

早稲田大学に入学してからあっという間に、半年が経ちました。生活で支援していただいていることで、学業や社会活動に多くの時間をかけることができ、充実的な学生生活を送ることができました。この半年間環境・エネルギー研究科の学生として日中環境実践研究を行いました。

この研究は早稲田大学環境・エネルギー研究科と北京大学環境科学与工程学院が共同で運営しています。研究テーマは、日中両国に共通して重要な環境エネルギー分野の「大気汚染の現状と新しい対策への動き」です。このテーマに関して、①政策推進、②経済・社会変革及び③技術開発・普及の3つの要因に着目して、両国の取組の差異と特徴を読み解き、日中間の交易・技術移転、国際協力等の相互作用での影響や効果に対する理解を深め、今後の日中両国をはじめ国際社会の環境保全と持続可能な発展のあり方を対象として研究します。また、早稲田大学と北京大学から参加する学生間の交流を通して、日中友好の発展にも貢献します。私は技術グループに配属して研究しました。大気汚染物質の人為的な発生源には固定発生源と移動発生源に分けられます。その中の固定発生源は工場、発電所、事務所などが挙げられ、移

動発生源には自動車、船舶、航空機などがあります。ゆえに、私たちは東京、埼玉県及び周辺地域にある、セメント工場、発電所、自動車生産工場、ごみ処理場などを視察しました。大気汚染に対して工場の処理方法は燃料処理、燃焼処理、後処理などが運用されています。例えば、大気汚染に一番関係深い排煙に対して、横浜の磯子火力発電所は選択接触還元法の排煙脱硝装置、電気集塵装置、乾式排煙脱硫装置を導入しました。排煙脱硝装置はアンモニア選択接触還元法により、排煙にアンモニアを注入し、反応器内に多量にえ付けられた触媒上でNOxを選択的に反応させて窒素と水に分解する方式で脱硝します。電気集塵機は、排煙の中に含まれる各種ダストの微粒子に電荷を与え、集塵極に引き寄せることでダストを捕集する集塵装置です。乾式排煙脱硫装置は排煙の中のSOxは活性炭に吸着された後に、加熱、圧縮で高濃度になったSOxが硫酸や硫黄などに変換される装置です。これらの排煙処理装置によって90%以上脱硝、集塵ができるとの成果が挙げられました。今日本の企業にある優れた技術を中国に導入、普及などは次の課題です。

研究の他に、中国人の友達と共に、日本人の友達もたくさんできました。週一回新宿の多文化センターに通い、世界各国の人々と話し合っており、勉強になります。そして、早稲田大学の日本語教育研究センターの日本語科目個別相談会サポートをしました。日本語科目個別相談会は来日直後で日本語に慣れていない学生や日本語レベル初級の学生などが、早稲田大学における学生生活をスムーズにスタートできるよう、カリキュラム内容や時間割の組み立て方、科目登録方法などを先生が分かりやすく説明します。私は相談会当日に先生の説明を通訳して支援しました。新入生のみんなの力になることはとても喜んでいます。

奨学生として採用していただいたことを常に意識し、少しでも環境エネルギーの発展と日中友好を促進できるように今後も努力していきたいと思っています。

「今後の夢・抱負、 早稲田大学での生活・思い出等」



リッター ビブンソンティー

(卒業予定 2018 年 9 月)

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科)

23歳の早稲田大学の大学院生のアジア太平洋研究科のリッタービブンソンティーと申します。タイのチャングマイの出身です。今は二年生ですが、今年の9月に早稲田大学を卒業します。その後、研究を完了した後に日本で働きたいです。過去には、チャングマイでARTZKOOLという語学学校で5歳から12歳までの生徒に英語を教えました。早稲田大学院生になったのは人生にとって大事な好機です。早稲田大学のアジア太平洋で様々な国際関係に関することを勉強しまし

た。そして、日本語を勉強して、とても有意義でした。私の国のことをもっと学ぶ機会が与えられました。

将来は国際関係に関する仕事をしたいです。自分の希望は、日本で働くことです。国連やタイ大使館で働くのはいいと思います。早稲田大学の生活のおかげで、国際的な考え方を習いました。私は、よりオープンな考え方になりました。自分の成長が、感じられます。早稲田大学に来ていろいろな人と出会って、とても嬉しいです。

早稲田大学で過ごした数年間の経験をもとに、他の人に私の知識を広げたいと思っています。特に日本文化や日本の素晴らしさなどを、他者やタイまたはアジア地域の人々に伝えたいです。そして、様々な文化や教育交流に貢献できるようになりたいと考えています。私は、両国の関係を強化するものになりたいと思っています。

ASEAN 主要6か国における対日世論調査(2008年)外務省によると、アジア人が訪日の最も関心のあることは、文化・芸術です。その中の1人として、日本とアジアの架け橋になりたいです。とてもチャレンジなことだと思いますが、あきらめません。最後まで頑張りたいです。

公認会計士稲門会ホームページについて

公認会計士稲門会では、2012年10月にホームページを開設いたしました。是非、ご覧ください。

URL www.cpa-tomonkai.jp

公認会計士稲門会は、会員相互の親睦、情報交換の場として会員がボランティアで運営しております。総会、ゴルフコンペ、忘年会等の親睦や合格祝賀会の開催等の後進育成をしております。また、特筆すべき事業としてアジアからの留学生

に対する支援と母校への講師の派遣を行っております。母校とは「士学協同」し高い評価をいただいております。

コンテンツが、不十分ですが今後充実させていただきますので、よろしくお願いいたします。

会費納入は、HOME⇒入会案内⇒入会登録してください。

住所変更の場合は、「お問い合わせ」から住所変更の旨入力ください。

「国際化の流れに掉さして？」



辻 正雄

(1969年第一商学部卒業)

1971年商学研究科修士課程修了

1974年商学研究科博士課程満期退学

1978年カリフォルニア大学ロサンゼルス

校経営大学院博士課程 C.Phil. 取得)

この度は会報への執筆機会を頂戴いたしまして、誠にありがとうございます。公認会計士稲門会の諸先生方には、早稲田大学在任中に格別のご厚情を賜りながら、退職に際して御礼を申し上げる機会を逸してしまいました。まずは、失礼の段をお詫び申し上げますと共に、皆様のお陰で無事に定年まで勤めることができましたことへの感謝を申し上げます。

2016年3月末日をもって早稲田大学を定年退職し、4月より名古屋商科大学大学院の研究科長補佐・教授として、社会人を対象とする大学院修士課程の学科目を担当しております。併せて、早稲田大学から名誉教授の称号をいただき、産業経営研究所と会計研究所の招聘研究員として研究活動にも参画しております。

名古屋商科大学ビジネススクールは歴史の浅い大学院ですが、既にAACSBとAMBAという2つの国際認証を取得し、この秋にはEQUISの国際認証を取得すべく準備を進めております。これら3大認証を俗に「トリプル・クラウン」といいますが、取得している大学院は日本にありませんので、実現すれば日本初の栄誉に輝きます。また、世界3大ランキングの1つであるQS社の最新年間ビジネスマスターランキングによると、「グローバルMBAランキング」で、世界111位、アジア太平洋1位、となっております。まさに教職員が一丸となって国際化を推進している、大変チャレンジングな大学院です。

国際認証を有することのメリットは、海外からの

研究者および留学生との活発な国際交流や志願者数の増加に現れています。現在、47カ国から114名の交換留学生がダブルディグリーのプロダクトに在籍し、半数を超える教員が海外の学位を取得しているか、海外勤務の経験を有しています。

このように、国際的に通用するMBAを授ける大学院を目指しているため、着任するや私には、著書や論文をベースに自説を系統立てて講義する旧来のスタイルを捨て去ることが求められました。ハーバードのケースメソッドによるアクティブラーニングを徹底するように促されもしました。ケースの学習から疑問を次々に提起してクラスにそれ等を問い掛けると、誰を指名しようかと迷うほど沢山の手が挙がり、課題のレポートは読みごたえのある力作揃いです。教員も学生もクラスでの討議から国際的な実践を共に学んでいく姿がそこにはあります。

名古屋商科大学に着任した後も、やはり早稲田大学のことが気になります。早稲田に来ては名古屋の良いところを、名古屋に行っては早稲田の良いところを話すようにしております。ビジネススクールとして共に競い合い、世界中の志のある人々が集う大学院であってほしいと願うからです。ちなみに、早稲田大学ビジネススクールは現在、EQUISとAACSBの取得に向けて申請する過程にあります。

かつて私も青木茂男先生のお許しを得て、助手の身分のままカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)経営大学院博士課程に3年間留学させていただきました。その後を顧みると、賜った学恩に報いるには、さらに研鑽を積まずに已むことはできないとの感慨に至ります。本年秋に早稲田大学国際会議場に於けるアジア太平洋管理会計学会の開催を引き受けましたのは、世界に開かれた大学であれと謳う早稲田大学の精神に沿うものであると考えたからです。ありがたいことに、稲門会の佐藤正典先生はじめ社本公一先生や石渡信行先生のご助力により、監査法人・税理士法人からご支援をいただくことができました。また、校友の方々を中心に活動されている内部監査協会からは、報告者の派遣というご支援までいただいております。

学生時代から数えて半世紀にわたり早稲田大学に身を置くことができたことの幸せを改めて感じております。

「学者の仕事」



薄井 彰

(商学学術院教授)

1987年大学院商学研究科博士後期課程退学
博士(商学)早稲田大学)

これまでも研究は楽しかったが、最近、会計学が面白い。複式簿記、クリーンサープラス、発生主義、保守主義、費用収益対応といった会計学固有の概念を経済学のフレームワークで定義し、長期の大量データを利用して会計制度の生成から展開までを歴史的・実証的に検証できるようになった。企業の開示行動や利益操作や監査の質なども数理的にモデリングすることが可能である。こうした研究を基礎として、2015年に初めての単著『会計制度の経済分析』を中央経済社から上梓した。20年近くをかけた仕事であったので、総頁856頁という大部になっていた。

幸いなことにこの研究は学界と実務界で高く評価していただいた。身に余る光栄なことに、2016年に第59回日経・経済図書文化賞、第44回日本公認会計士協会学術賞、日本会計研究学会太田・黒澤賞、日本会計史学会賞、日本経営分析学会賞、2017年に日本ディスクロージャー研究学会賞の受賞の榮譽に浴することができた。会計学分野で早稲田大学出身者が日経・経済図書文化賞を受賞したのは、1962年の青木茂男先生、1964年の西沢脩先生、1995年の千代田邦夫先生以来、4人目であった。

大学院のころから私は会計学の議論よりも資本市場の価格形成メカニズムと情報の関係を解明することに夢中であった。経済学やファイナンス論を基礎とする研究スタイルである。3人の恩師、染谷恭次郎先生、石塚博司先生、小川洸先生の仕事とは異なる新しい領域を求めている。しかしながら、ようやく完成できた『会計制度の経済分析』は、会計学の本質と会計・監査制度の変遷を経済学とファイナンス論によって歴史的・数量的に裏

付けるという意味で、恩師たちの影響を強く受けるものになった。早稲田会計学のDNAというものであろうか。学問は不思議である。

商学部の指導教授であった染谷恭次郎先生の財務会計の大学院講義は圧巻であった。教科書はご自身の論文集『財務諸表3本化の理論』(国元書房、1983年)だった。若き頃の論文は国際水準の独創性と才知が溢れんばかりである。何より驚いたのは、30数年間に執筆された多岐にわたる論文が、最後には会計学の美しい体系をなすことであった。まさしく学者の仕事である。

大学院商学研究科修士課程は、染谷先生のお話しをえて、石塚博司先生の研究室に入った。石塚先生のグループの精緻な実証研究は、制度的、規範的研究が主流の日本の会計学では異彩を放っていた。石塚先生から資本市場ベースの会計学、大塚宗春先生からファイナンス論、佐藤絃光先生から契約理論、そして当時大学院生であった河榮徳先生からコンピュータ科学を学ぶことができた。いずれも私の研究の基礎となる学問分野である。本当に幸運であった。

博士後期課程では、石塚先生が研究指導をお持ちでなかったのが、小川洸先生に指導を仰ぐことになった。小川先生からはステークホルダーの成果分配に重点をおく会計学を学んだ。先生は学会の会長などいくつもの重職を務めており、いつも忙しくなっていた。私も学会長として、自分の研究をするだけでなく、学界全体の発展に貢献すべき立場になり、小川先生の当時のお気持ちがようやくわかった気がする。

2004年に日本橋で開校した大学院ファイナンス研究科では、その創設に関わり、公認会計士稲門会をはじめ、実務の最先端の先生方とともにアカデミズムとプロフェッショナリズムが融合する教育プログラムの開発と実践をすることができた。この経験は会計・監査の実務や制度を実証的に研究する視座となっている。

体系的な学術書を書き上げることができるのは、学者としてとても幸運なことである。恵まれた環境であった。深く感謝する次第である。

会計は奥深い。まだまだ分からないことばかりである。お世話になった学界や実務界の先生方からは、まだ学者の仕事を成しえていないとお叱りの言葉をうけそうである。一步一步、独創的でより刺激的で挑戦的な研究を続け、少しでも会計学の面白さを次世代に伝えていきたい。

「公認会計士とプロボノ活動」



齊藤 剛
(平成6年商学部卒)

私が以前にこちらの会報で、海外赴任の経験談をご紹介して8年が経ちました。この間に、社内外における多くのプロジェクトに関わってきました。そのような中、監査法人のパートナーの立場や公認会計士の世界とは別の分野で、自分の様々な経験を活かし社会貢献出来ればということで、昨年秋から、週末や祝日などを活用して、NPO法人キーパーソン21というキャリア教育団体の社会人会員という立場でプロボノ活動に関わっております。今回は、この活動についてご紹介させていただきます。

私は、公認会計士の道を志すまでは、学校教育に関わりたいたいという夢をもっており、教育の面から社会貢献したいとの想いで、私が住む川崎市から全国展開し、主に小学生・中学生・高校生を対象にしたキャリア教育を支援する、キーパーソン21の活動に関わることにしました。このNPOは、学生達のわくわくエンジンを、つまり、自分の気持ちが向いて動き出さずにはいられない原動力のようなものを引き出し、皆がいきいきと仕事をして生きていくことが当たり前の社会の実現を目指して活動しております。

まずは、業種で経験も全く異なる社会人の皆様と一緒に、都内の公立中学生向けに、ゲーム形式で楽しみながら、わくわくエンジンを引き出し、認めて伴走していく「すきなものビンゴ&お仕事マップ」プログラムに参加しました。このプログラムを通じて、学校教員でもない、保護者でもない、我々のような第三の大人達が学校現場に入ることによって、学生達が自分や友達の良いところを発見し、自信をもっていくという変化を目の当たりで実感することが出来ました。また、私とは経験も

全く異なる方々と活動を共にする中で、中学生と接する際の目線や話し方などに関する私自身における課題も見つかり、監査法人内での経験の浅いスタッフと接する際の心構えにおいても通ずるものを学ぶことが出来ました。

これに加えて、このNPOの大学生会員を応援しサポートするチームに精力的に参加しております。この大学生達は、前述の小中学生向けのプログラムなどに社会人会員と一緒にナビゲーター役として参加したり、経済的困難を抱える中学生への学習支援、さらには、進路選択を考える高校生や社会人に向けて、自分自身の物語や未来像を赤裸々に伝える活動などをしております。ここで、私を含めた第三の大人達は、一人一人の大学生と向き合い、彼らが社会との関わりを意識し、ときには社会における様々な課題を解決するための伴走役として、彼らのわくわくエンジンを活かした、社会での存在意義を見つけることをサポートしております。これにあたっては、私自身が今までに担当した様々な業界のクライアントでの経験や、関わってきた社会課題に関する知見が大いに活かされるとともに、彼らのわくわくエンジンの本質を見極め、その行方を示唆したり、思考を貸してあげることで、彼らのわくわくした想いが自らの志に昇華していくのを実感出来、大きなやりがいを感じ、さらに、私自身が学生ならではの新しい視点やイノベーションへの情熱など、多くを学ばせていただきました。

また、最近では、このNPOと企業、大学教育関係者や大学生会員との連携による、様々な社会課題の解決に関わるための新しいアクティブラーニングプログラムの開発や、NPOの広報活動の拡充など、多種多様な社会連携による教育実践のイノベーションの取組みに関わっております。

以上、私がプロボノ活動に参加した際の気づきをご紹介させていただきました。今現在、ほとんどの企業で働き方改革を進められているかと思いますが、この本質は、イノベーションの推進にあると私は考えます。自ら関わっている本業でのイノベーションのためにも、NPOなどで多様な職業にある方々と一緒に社会課題の解決に関わり、非日常の体験をしながら、色々な自分を生きつつ、新たな「価値」を創り出していくことをお勧めします。

「会計士就職戦線異常なし」(※)



稲垣 直明
(1996年商学部卒業)

一昨年の4月1日、20年振りに私は早稲田大学の正門に立っておりました。入学式後のサークル勧誘の喧騒の中、人込みをかき分け大隈銅像にたどり着き、そびえ立つ商学部の8号館新校舎に驚きを覚えながら、探し出したのは、「会計学会」という会計サークルでした。

監査法人のリクルート担当の使命を帯び、母校の後輩に直接アプローチをしようと考えて一念発起して母校に戻ってきたのですが、探し出した「会計学会」は、残念ながら私の在学中とは異なり、会計士志望者が殆どいないサークルとなっていました。失望し、正門を出た私が見たのは右手に大原、左手にTACの公認会計士講座の校舎でした。なぜ、ここに予備校がと思いつつ、20年前、大原水道橋校に通っていた私は、勇気を振り絞って大原の校舎に入り、先生に最近の会計士受験生の状況を詳しく教えて頂きました。平成20年の大量合格時代に人気が高まり、早稲田の正門前にも各予備校の公認会計士講座の校舎が登場したものの、平成24年の就職氷河期を経験し、会計受験生の人数が大幅に落ち込み予備校としても受験生の確保に苦労しているという実態を伺いました。近年、監査法人の求人が復活し、就職戦線が売り手市場に変わっていく中でも、なかなか受験者数は復活してこないそうです。景気の都合に左右される業界の悲哀を感じ、監査法人と予備校が協力して業界としての魅力を伝えていくことの必要性を痛感しました。

向かいのTACにも飛び込み訪問し、各監査法人の就職案内パンフレットがずらりと並ぶ中、話を聞いたところ、会計士は就職が厳しいという噂が予備校代の出し手の親にも残り、講座の受験者が伸び悩んでおり、公務員を目指す学生が多い現状を伺いました。

最後、CPA学院という近年慶応・早稲田生に焦点を絞り合格者を伸ばしている予備校に飛び込

み、対応頂いた先生から、最近は大学付属校の出身者が高校三年生から公認会計士講座を受講し、早い方では大学2年生で合格し、大学3年生で合格を目指すという方が多いという話を聞き、近年の合格者の低年齢化が進んでいることを実感しました。受験勉強も、予備校で授業を受けるのではなく、学業の合間にスマホで授業を受けてしまう方も増えているということで、隔世の感を受けました。そんな彼らをどうやったら惹きつけることができるのかという問いに対して、学生が興味を持つのは情報インプット型の説明ではなく、アウトプット型の実務経験が出来ることではないかというアドバイスを頂きました。

20年振りの入学式、最後に懐かしのメーヤウでタイカレーを食べながら、現在の超売り手市場の中でどうやったら、優秀な方に入社して頂けるのか考え抜きました。

その答えは、グループベースで、架空の会社の財務諸表を題材に財務分析を行い、経理部長役に質問し、様々な資料を入手しグループで協議し、最後の検討結果を社長役に報告するという監査インターンシップというイベントの開催でした。受験勉強では学べない監査の現場を実際に体験して貰うことで、実際に監査で必要となる人から話を聞き出すということの重要性、発見した事項を論理的に伝えることの大切さを感じて貰い、参加者からは監査の楽しさが分かったなどの良いフィードバックを頂きました。

若い方に監査の面白さを実際に感じて貰うこと、準備に時間もコストもかかる地道な取り組みですが、予備校とイベント開催などで協力して業界のすそ野を広げていくべく取り組んでおります。それが20年振りの早稲田の入学式の突撃取材で得た教訓でした。

また、来年の稲門会の公認会計士合格祝賀会で多くの会計士合格者の方々にお会いできることを願い、寄稿文を締めさせていただきます。

(※) タイトルは1991年公開の織田裕二主演で早稲田大学を舞台とした「就職戦線異常なし」を拝借したのですが、そのキャッチコピーの「なりたいたいものじゃなくて、なれるものを捜し始めたら、もう大人なんだよ。。。」「というセリフ、リクルートに関与する立場となり深いセリフだなと感じます。バブル時代の面影が強く残り昔の早稲田校舎も数多く出てくる映画でネットでも閲覧出来ますので、ご興味のある方は是非ご覧ください。

「米国駐在の体験」



白井 亨

(教育学部国語国文学科 平成9年卒)

私は2012年10月～2015年9月の3年間、現在所属する太陽有限責任監査法人から米国のメンバーファームである Grant Thornton LLP（グラントソントン）に駐在しました。所属先はシカゴの米国本部、いわゆるナショナルオフィスの中の日系企業グループでした。当時の駐在先の米国グラントソントンのCEOは、中国のメンバーファームのリーダーを務めた経験のある国際派の英国人であり、米国で活動する様々な国の企業を個々にサポートしていくためのグループを、本部の中で国別に立ち上げているところでした。私の所属していた日系企業グループはその先駆けとなるグループの1つで、2011年にスタートした1年後に私が参画した形になります。本グループは立ち上がったばかりでしたので、最初はある程度の自由がありました。しかし、私は太陽から正式に米国派遣された第1号の駐在員でしたし当然前任者もいませんので、活動方針については常に頭を悩ませていました。

具体的に担当したのは、日系企業の監査業務や事業開発、出向元の監査法人やアドバイザー部門からの依頼を米国各地のオフィスのパートナーに繋ぎ、エンゲージメントを確立させるリエゾン業務が多かったと思います。また、現地の米国企業クライアントの日本子会社に関する業務について、日本側とアレンジすることもありましたし、フォレンジック業務もありました。グラントソントンの日米間案件の様々な業務に関与させて頂いていたと思います。また、出向元からの依頼で USGAAP や米国実務等の情報収集なども行っていましたし、時には日本でのコンタクト先である独立系のアドバイザー会社から依頼を頂き、米国でのアレンジを行うこともありました。こうした業務を行っていくに当たり、シカゴにいる日系企業グループのメンバーは私を含めて数人程度しかおらず、特に監査のバックグラウンドのあるメンバーは私1人でしたので、とてもリソースが

足りませんでした。そこで、米国グラントソントンが当時全米約55拠点で抱えていた日系企業向けのサービスを担う人たちのバーチャルメンバーのようにして繋ぎ、必要な情報交換やサポートをし合うことで、何とか全米をカバーできる体制を作っていました。

こうした活動を行っていく中で、特に苦勞をした点はやはり数字面だったのではないかと思います。米国では一般的に採算管理やパフォーマンスに対する要求は厳しいと思いますが、立ち上がったばかりのグループとして実績が上がらなければ継続できないという事情があり、数字面での結果は常に必要とされるものでした。業務の種類は様々ありましたが、単にエンゲージメントを確立させるようサポートするだけではなく、クライアントに直接チャージする時間のノルマも厳しく要求されていました。これは、グループ引いては個人のP/Lの売上高となりますので、グループ存続のためには社内的に不可欠でした。活動開始から間もないグループへの依頼が毎日多数あるわけもなく、業務の合間の時間で社内営業をし、米国企業クライアントの監査業務にも関わらせてもらっていました。それでもクライアントにチャージする時間が足りないときは、本来スタッフに頼む業務を自分で担当して時間を作りました。

また、数字の他にもプラクティスの相違や日米の制度の相違でも苦勞していたと思います。日米の違いを説明できる人が法人内おらず、分からないときに誰かに教えてもらうことはできませんでした。これは、忙しい業務の中で現地の英語の資料を調べ、読み、理解するための時間を作らなければならない、ということでもあります。私は駐在前に、日本で11年の監査経験がありましたが、日本の上場企業の監査だけでなく米国企業の日本法人の監査業務も担当してはいました。しかし、現地で特に米国企業の監査チームに入ってみると、会計処理に対する考え方の違いから意見が合わないことも多かったですし、米国の社会制度に対する理解が浅いためにどのような会計処理が正しいのか、自分で判断がつかずに悩んだことも多くあったと思います。

業務での苦勞話が続いてしまいましたが、現地での日常生活はとても楽しく、素晴らしい経験でした。多くの友人もできました。仮に時間が駐在前に戻ったとして、同じ駐在をしたいかと問われたならば、間違いなくまた赴任することを選ぶと思います。一言で言えば、楽しいことも辛いことも、日本にいたときの数倍、という表現が正しいかもしれません。

「人生は一度だけ、との思いから」



周藤 貴裕

(平成7年 政治経済学部卒業)

公認会計士稲門会の合格祝賀会に出席するために久しぶりに母校を訪れると、校舎にも周囲の街並みにも変化があるなか、大隈重信像とその見つめる先にある大隈講堂の変わらぬ姿が印象に残りました。

早稲田に入学したのは、人生は一度だから興味深い道に進みたいという思いによるものであり、実際に、様々な経験を得ることができました。卒業後の今も、同じ道を進んでいると感じています。

1. 前職のこと

前職では、公認会計士受験指導校の講師を務めており、調べて学び教える仕事は自分に向いていると感じました。テキストや答練を作成し、受講生及びカメラの前で講義を重ねる日々は、ずいぶん長くなりました。

短答式試験・論文式試験を受験し、直ちに模範解答・解説をインターネット上に示すときの緊張感は今でも忘れられませんが、楽ではない仕事は自分の力量を引き上げてくれるとの実感もありました。

ただし、講師の仕事を通じて会計及び監査の全体像は把握できるようになっても、現場で実際に起こる事については、イメージできないものが多くありました。会計及び監査を仕事とするのならば、より広く深く関わろうと、会計士の世界に進むことを考えました。

2. 試験のこと

さて、ここでは、本誌を見る機会を得た、これから試験合格を目指す皆様に、講師生活を経て40歳を過ぎて転職した私の経験をお伝えしたいと思います。

短答式試験では、試験終了直後に耳にする「今回は簡単だった!」「高得点が取れるはず!」の声に驚くかもしれませんが、これは不安感の裏返し、あるいは甘い見積りによることが多く、実際はそこまで簡単ではない場合がほとんどです。

真夏の論文式試験は過酷に思えるでしょうが、緊張感が却って奏効するのか、3日間くらいならば体力・気力は何とか続きます。この私ですら続くのですから、若い皆様はもちろん、同年代の皆様も問題ないと思います。

年齢とともに記憶力が低下するのではとの不安に関しては、新しい知識や考え方に触れることは頭の刺激となるのか、試験に耐え得る記憶力は十分に保てると感じます。瞬間的な丸暗記力は低下するかもしれませんが、反復により定着させられる記憶量が確保できるのは、他の器官と同じく脳も鍛えれば活性化するということなのでしょう。この点における指針は、「三度覚えて三度忘れてからが、記憶定着の第一歩」でした。

そもそも、年齢を問わず、新たな世界への興味は、体力・気力や記憶力を後押ししてくれるのではと感じています。

3. 就職のこと

試験に合格すれば一段落となるかと考えていた私は、それが誤りであることを思い知らされました。合格発表直後から就職説明会や面接が続き、それこそ試験直前よりも慌ただしい日々となりました。

監査法人への就職を希望しており、就職説明会の段階では新たな世界にワクワクしていましたが、いざ面接に進むとなると、若くはなく実務上の専門性もない私がどのように評価されるのか、不安が深まりました。試験ならば自分の得点で結果が出せますが、面接には相手があり、自分の努力だけでは済まないからです。

不安を抱えて面接を繰り返すなかで、法定監査の他にIPO等にも興味がある事を再認識し、幸運にも、その分野に熱心な監査法人の内定を頂くことができました。

試験と就職を経て、「人生は一度だから様々な体験をする」ことは楽しくも気楽なものではないと再認識しました。そのような日々は不安を伴うことがあり、家族や友人をはじめ周囲の方々に支えられたからこそ続けることができた、改めて実感しています。

4. 今後の夢

まずは会計及び監査の実務を身に付け、法定監査のみならずIPO等、様々な形で企業や社会に関わるなかで、自分の経験をより活かせる分野を一生をかけて追求してゆきたいと考えます。

なお、職業的専門家の道を進むなかで、迷いや悩みが生じたならば、母校を訪れて、自分の原点を見つめ直そうかと思っています。

「合格までの道、今後の道」



平田 薫行

(2007年(平成19年) 大学院法務研究科 修了)

1. はじめに

私は昨年公認会計士試験に合格した平田薫行と申します。僥越ながら、私の合格までの道、今後の夢等について、少しお話をさせていただきます。

いきなりですが、物事に取り組む時期に遅過ぎるということはないですし、物事に取り組むことについて「向き・不向き」はありません。いずれもその物事についての真摯な関心・欲求があれば足ります。

今回の拙文は、結果としてそんなお話になっていればよいかなと思っています。

2. 経歴

成人してからの私は、①慶應義塾大学経済学部、②三井住友海上火災保険株式会社、③早稲田大学大学院法務研究科、そして④新日本有限責任監査法人と道を繋げて、今、これをお読みの皆様と共に仕事をする機会を得るに至りました。

これらの経歴のひとつひとつについて、これからじっくりと語り上げたいところなのですが、そんな愚挙にお付き合いいただく訳にはゆきません。そこで泣く泣くあらすじのみをお伝えさせていただきます。①慶應義塾大学では特に開発経済学、②三井住友海上では主に企業・組織・官公庁営業、③早稲田大学大学院では特に経済法にそれぞれ注力してきました。いずれにおいても、人に恵まれ、とても充実した時間を過ごすことができました。

3. 公認会計士試験へ

しかし、決定的な出来事があった訳ではありませんが、私は公認会計士になることを決めました。様々な理由のうち、ここで書けるようなものを列挙しますと、まず①顧客等へ提供し得るサービスの質、専門性による担保の欠如に不安と疑問を有するようになりました。加えて、②顧客や仕事と向き合う姿勢としてのプロ意識の欠落へのおそれ

が強くなってきました。そのため、③会計・監査に関する見識を基にして企業の状態等に関する理解を深めるために、そして④ビジネス、儲け方に関する理解を深めるために、更には⑤能力の社会的証明である資格を取得して一層の信頼を得るために、加えて⑥自分達の人生を自分達で作ってゆくに、一念発起して、プロフェッションとしての公認会計士を志したのです。

ここからの受験時代において「仕事と受験はどちらが大変か」という問いかけをされることが少なくありませんでした。端的に言って受験の方が大変でした。私がこれまでの人生で最も苦しんだものは公認会計士試験です。

その理由はいくつかあるのですが、ここでは、仕事は他人のためのものであり、受験は自分自身のためのものであるという点を挙げたいと思います。つまり自分のやっていることが自分以外の人達にとっておよそ意味のないものであることから、無意味なことに全力で取り組んでいるような虚しさを覚えてしまったのです。

4. 今後へ向けて

こんな青臭いことを考えてきた私も、今、新日本有限責任監査法人という最良の環境を得て、再び人の役に立てる喜びを実感しています。また「(異常に)遅れてきた新人」として改めて成長する機会を得られた訳ですから、大組織における仕事を満喫しながら、すくすくと育って一刻も早く外観に見合った公認会計士としての能力を身に付けたいと考えています。

そして、いわゆるスタートアップ支援に注力してゆくことで、社会を少しでもよりよいものに変えるための一助となれるよう邁進してゆきたいと思っています。

なお、実は、今後の目標といったものを定めていなかったりします。今取り組んでいることを将来の目標を実現するための単なる手段に貶めてしまうような気がするからです。つまり、今接している皆様のために役立つことが今の私の目標ということになるのです。

とはいえ、最初の就職活動の頃からまったく変わっていない私の究極の目標のようなものはあります。それは、できる限り数多くの方々にとっての「最高の話し相手」になるということです。

これからの私はこの究極の目標へ向かって引き続き努力を重ねてゆくのだと思います。

今後ともご指導ご鞭撻の程を何卒よろしくお願い申し上げます。

「公認会計士への果て無き道」



井山 文枝

(2012年文化構想学部卒)

このたびは試験合格者として公認会計士稲門会の会報に寄稿させていただくという貴重な機会をいただき、ありがとうございます。文化構想学部出身の私がなぜ会計士?と思われる方もいらっしゃるかと思いますので、合格までの道と今後の目標について書かせていただきます。

1、合格までの道

(1) 幼少期から大学時代

私の公認会計士試験合格への道のはじまりは、両親の出会いに遡ります。私の両親は簿記学校で出会いました。ともに税理士試験に合格し、その後、税理士事務所を始めて現在に至っています。私はこのような家庭に生まれ育ちましたので、簿記や会計・決算書などは身近な存在ではあったのですが、自らがこの道に進むことは考えてもみませんでした。

父と兄と同じ早稲田大学に進学した後も、早稲田祭運営スタッフとしての活動や、Hello! WASEDAプロジェクトに参加して大隈先生ゆかりの佐賀を訪問するなど、公認会計士とは程遠い、早稲田大学とのかかわりの深い学生生活を過ごしました。その中で大学職員の方々と交流する機会が多くあったことが、新卒で大学職員として働くきっかけのひとつになりました。

(2) 就職・退職・留学

大学職員時代(残念ながら母校の選考には落ちてしまいましたが)は、財務経理系の仕事に携わりました。外部監査の対応をする機会もありましたが、当時は自分が監査する側になるなどとは少しも考えませんでした。上司や周りの人にも恵まれ、仕事内容にも不満は全くなかったのですが、留学をしたいという気持ちを抑えきれず、思い切って退職し、アメリカのシアトルに留学しました。

留学中は法律やロジスティックスなどビジネスに関するトピックやビジネス英語を学ぶとともに、ボランティアや地域のサークル活動にも積極的に参加しました。充実した1年間はあっという間に過ぎ、帰国後のキャリアを考えたときに公認会計士という選択肢に至りました。専門性を持って働き、それをさらに高めるために行動する人に数多く出会い、私もそうなりたいと考えるようになったからです。公認会計士の仕事の多様性にひかれたことから、公認会計士を志しました。

(3) 資格勉強

帰国後、予備校に申し込み勉強を開始しました。移動時間とランチ代を節約するため、通信課程で勉強を始めました。勉強仲間はいませんでした。家族の支えのおかげで困ったことはありませんでした。兄は公認会計士として働いており、姉は仕事・家事・3人の子どもの育児を両立させながら簿記1級合格に向けて勉強中です。家族全員が、膨大な試験範囲に辟易とした経験、答練で思ったような結果が出ない経験があったため、私の試験勉強を自分事のように励ましてくれました。最初に挑戦した12月の短答試験には落ち、5月の短答試験に合格、そしてその年の8月の論文式試験に合格しました。これもひとえに家族の支えのおかげです。

2、今後の目標

現在は有限責任監査法人トーマツにて、公共機関や病院に対する監査業務や、アドバイザー業務をする部署に配属になりました。

私の当面の目標は、所属するチームの役に立つことです。監査法人では1年生なので、挨拶を積極的にしてチームの雰囲気をも明るくすることや、英語やExcelを活用することでチームに貢献していきたいです。

将来的には、修了考査に合格し、専門知識を身に着け、社会の役に立つことです。例えば一口に病院の運営主体といっても医療法人、社会福祉法人、国立大学法人など様々であり、法人形態により会計基準も異なります。専門知識を向上させ、チームや法人だけでなく、広く社会に貢献していきたいです。

公認会計士稲門会会員みなさまには、これから様々な場面でお目にかかるかと思います。今後ともご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

「支えを受けて」



伊藤 萌

(政治経済学部 2016 年卒業)

このたびは、公認会計士稲門会の会報に寄稿する機会をいただき、誠にありがとうございます。稚拙な文章ではありますが、自分が会計士を目指した経緯と今後について書かせていただこうと思います。

1. 会計士を目指したきっかけ

私が公認会計士という職を意識し始めたのは、周りが就職活動を始めた大学3年生の秋ごろのことでした。

それまで、憧れであった早稲田大学に入学することができた満足感と達成感から将来のことは全く考えておらず、サークル活動やバイトにあけくれる日々を過ごしておりました。

そのような学生生活を満喫していた時期に、同じように遊んでいた周りの友人たちが段々と将来を考え、行動してゆく姿に刺激され、初めて自分が将来どのような人間でありたいか考えた際に、出産や子育てといったライフイベントを経験しても自らのペースで働き続け、自立した人間でありたいと考えたのです。

そのためには、キャリア形成にたくさんの選択肢があり、自由に選ぶことができる職業に就く必要があると思い、手に職を持っていれば自らの知識を武器にすることでその願いがかなえられるのではないかという安直な考えから、資格を取得することに思い至りました。

色々な資格を検討したのですが、その中で会計士を選んだ理由は、さまざまな会社や組織の裏側を見ることができることは何だか楽しそうで、視野も広がりそう、という単純なものでした。

そんな単純な考えから始めた会計士試験の勉強で

すが、実際に勉強してみると、自分の想定していたものよりはるかに難易度が高く、思い描いていた合格時期より1年遅れての合格となってしまいました。勉強を始めてから合格するまでの間、大学を卒業し、周りの友人たちが社会人として働き着実に自らのキャリアを形成してゆく姿を目の当たりにして、自ら選んだ道でありながらも焦りと不安の募る日々の中で選択を後悔した時もありました。

ゴールの見えない勉強生活の中で、何度も投げ出したいと思ったこともありましたが、家族や友人といった周りの方々の支えと応援のおかげで合格まで漕ぎつくことができました。自分ひとりの力では決して合格することは出来なかったと思っております。

この場をお借りして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

2. 今後について

現在、監査法人に勤務し、現場に出させていただいて4か月が経とうとしています。目の前の与えられた仕事をこなすことに精一杯で、会計士として自分は将来どうありたいかというビジョンはまだ見えておりません。

いまは目の前に与えられた業務に真剣に取り組み、監査を理解していくことを当面の目標としており、その中で、先輩方のアドバイスをいただきながら自らの将来像を描くことができればと考えております。

3. 最後に

慣れないことばかりで苦戦し、先輩方にご迷惑をおかけしてしまっている毎日ではありますが、勉強する前に思い描いていた会社の裏側を見る面白さを実感し、楽しく仕事をさせていただいております。

今の場所へたどり着くまで応援し、支えてくれた周りの人たちへの感謝の気持ちと謙虚な姿勢を忘れず、これからの会計士としての人生を進んでゆきたいと思っております。

最後になりましたが、稲門会の一員としてこのような機会をいただきましたこと、最後まで読んでくださったこと、誠にありがとうございました。

「合格までの道のり」



TA THI KHANH HOA

(タティカインホア) (ベトナム出身)
(商学部 2017 年卒業)

海外に行きたい！視野を広げたい！という思いで19歳の時に日本にきました。日本語学校を経て、早稲田大学商学部に入りました。最初、商学部の必修科目のなかで基礎会計が一番苦手でしたが、会計がわかるようになれば視野が広がりものの見方も変わっていくのだらうなとぼんやりと思っていました。大学3年生から内田和成先生の競争戦略のゼミに所属しました。ゼミ活動のなかで、企業の経営戦略を財務視点から分析するという課題がありました。当時、先生が出したお題は一つ目が製薬業界、食品業界といった異なる業界の代表的な企業の財務分析、二つ目がコンビニエンスストアの代表3社の戦略の比較というお題でした。会計がわからない、有価証券報告書の見方がわからなかった私にとって本当に悪戦苦闘しながらなんとか論文を作り、提出しました。発表日に他のゼミ生から様々な発表が聞けて、ゼミ生の全員が同じお題で、比較対象が同じでしたが、人によって切り口が異なり、各々のストーリーの裏付けとして財務の指標が使われていました。面白い！とわくわくしながら発表を聞いていた記憶があります。そして、会計と経営戦略は表裏一体であることが実感し、会計について学びたいと思い始めました。

学生時代は光陰矢の如し、大学3年生の夏あたりから就職活動を始めましたが、やはり専門性の高い職に就きたいならそれなりの専門知識も必要だとわかりました。しかし、大学に在学していた時にはこれというものが自分の中にありませんでした。そこで、PwC あらた有責任監査法人の公認会計士育成採用から内定をいただくことができたので、公認会計士を目指すことにしました。大学4年生の始まりに勉強を開始し、社会人一年目に試験に合格しました。なぜ一般企業ではなく、

会計士を目指して、監査法人に入ったかというところ公認会計士は自分が正しいと信じていることができる職業だからです。そのような正義感が魅力的で、その「正しいことをする」という言葉に惹かれました。私にとって公認会計士になることで自分自身の視野が広がるのみならず、自分の将来の選択肢も大きく変わると思います。合格してからも「正しいことをする」会計士になりたいと決めています。

これからの夢

公認会計士試験に合格して、これからやりたいことは3つあります。

一つ目は公認会計士の魅力をたくさん人に伝えていくことです。試験勉強していたころや試験に合格してから友人や親戚によく「会計士ってなにをするの？監査って数字をチェックするだけ？」といったような質問がよくされます。公認会計士は専門性が高い職業であることと身近ではないことで、なかなかイメージが湧きにくいのです。

二つ目は親のために帳簿と会計システムを作ってあげることです。私の両親はハノイの旧市街にあるドンヌアン市場で生地のお店を開いており、主に卸売りで布を販売しています。小さい商売なので帳簿は在庫管理から売上や販売まですべて手書きです。その上、毎年年末に母親が頑張って伝票に埋もれながら決算を締めるのをみてなにかしてあげたいとずっと思っていました。自分の会計知識と日本での実務経験で何らかの形で両親の助けになりたいと思います。

そして、最後に日本とベトナムの懸け橋になることです。6年前日本にきたことと自分が海外に行く、自分の居心地のいい場所を離れることだったのですが、いまは私の中で日本に帰るという形になりました。日本は私にとってもはや外国という感覚がなく、もう一つのふるさとです。ベトナムは生まれ育ったふるさとであり、日本は視野を広げて大人になっていく第二ふるさとであります。監査業務で様々な企業のビジネスプロセスや競争戦略を学び、上場を目指す企業のサポートやベンチャー企業のアドバイザー業務に携わってみたいと考えています。その後、自分が吸収できた知識や経験を活かし、ベトナムの企業やベトナムの政府と協力して、母国のベトナムの発展に貢献したいと思います。

自分の夢を実現できるように、素敵な公認会計士になれるように毎日一歩ずつ邁進していきたいと思っています！

「早稲田散歩(2) 早稲田大学歴史館」



松下 八寿彦
(1980年 商学部卒業)

早稲田大学記念館が、今年3月に本部キャンパス1号館1階開館しました。早稲田大学には、従来より演劇博物館（開館90周年）、會津八一記念博物館（創立20周年、旧図書館）がありますが、なんとなく古臭くて入ってもつまらない！と考える方もおります。筆者もその一人でしたが、すごく面白いです。3つとも入館無料ですので、地方会員の方も、上京した際には、母校見学してワセ

メシ（早稲飯）食べるのも良いですよ。

館内は、常設展示3エリア（「久遠の理想」「進取の精神」「聳ゆる薨」と企画展示ルームのほか、シアタールーム等で構成されます。「久遠の理想」では、小野梓、高田早苗等の紹介、「進取の精神」では、学術・研究、文化・スポーツ等、「聳ゆる薨」では、母校が誇る校友が紹介されています。ハイビジョンのキャンパスツアーも面白いです。

また、早稲田グッズショップとカフェも併設しています。ショップでは、時計やネクタイ、シャツの他、日本で初めて大隈侯がマスクメロンの栽培に成功したことにちなみ、高級メロンが販売されています。大隈庭園内の大温室でも栽培していたそうです。カフェクリオは、コーヒー研究会が運営。ハンドドリップのおいしいコーヒーがお奨め。

5月21日～6月1日まで、早稲田大学ミュージアムウィークが開催されます。色々なイベントがありますが、詳しくは大学のHPをご覧ください。



(入口)



(1号館、左は新3号館)

編集後記

昨年の公認会計士試験合格者の中には、ベトナムから早稲田へ入学された方がいらっしゃいます。日本(早稲田もかな)をふるさととおっしゃっているのが印象的です。

公認会計士稲門会稲門会奨学生からも2名ご寄稿いただきました。

母校が海外からの受入数トップ大学（日本学生支援機構調べ）で、グローバルユニバーシティで

あることを実感しました。キャンパスを歩くと、留学生と女性が多いのに驚かされます。

監査業務がチョー多忙の中、たくさんの会員からご寄稿いただきました。この場を借りて、御礼申し上げます。

(会報担当 松下八寿彦、編集委員 小口敬、古知新、衛藤祐介)

(印刷会社 三共総合印刷株式会社)